

社会的態度の構造的研究所

—態度構造研究の概観—

岩 淵 干 明
田 中 国 夫

目 次

I. 態度の定義

II. 態度の構造的研究所

II-1. 態度構造の規定

- (A) 多次元的概念としての態度
- (B) 一次元的概念としての態度

II-2. 態度構造の研究所

- (A) 態度内成分の一貫性についての研究所
- (B) 態度内成分の構造についての研究所
- (C) 信念・態度・行動の関係についての研究所

I. 態度の定義

態度 (attitude) は、社会心理学において、古くから中心的な概念であった。Allport (1935) は、「態度の概念こそアメリカ社会心理学の最も特異にして必要欠くべからざる概念である」と述べている。しかし、態度という概念を明確にまた一義的に定義することは困難であった。それは、態度が包括的な概念であるために、その定義や扱い方が研究者によって、かなり異なっており、したがって、その多義性とあいまいさを許容してきたためである。

このような多義的かつあいまいな態度の概念の最大公約数的な定義を Allport (1935) は試みた。Allport は、「態度とは、経験を通じて、体制化された精神的・神経的な準備体制であって、個人がかかわりあいをもつあらゆる対象や状況に対するその個人の反応に指示的ないし力動的な影響を及ぼすものである」と述べている。そして、Allport 以後も、多くの態度の定義がなされてきたのであるが、それらはいまだに多義的である。

態度の定義があいまいかつ多義的であることをふまえて、Shaw & Wright (1967)、田中・藤原 (1970)、藤原 (1977) は、以下の6つの点に態度の定義にとまなう特性について要約している。

1. 態度は反応のための先有傾向 (準備体制) である。したがって態度は刺激と反応との媒介物であ

り、直接には観察不可能な構成概念である。

Green (1954), Newcomb (1960)

2. 態度は常に対象をもつ。ここでの対象とは、人物・集団・価値・観念・制度といったものであり、これらの対象と主体-客体関係をもつ。

Sherif & Sherif (1969)

3. 主体-客体関係は、動機・情緒的性質を持つ。すなわち、態度はある一定の対象に対して、“良い-悪い”、“好き-嫌い”といった評価を下す。その評価は positive から negative へとその方向と強度とを変える。

Anderson & Fishbein (1965), Doob (1947), Osgood, Suci, Tannenbaum (1957)

4. 態度は一時的な生物体の状態ではなく、いったん形成されると比較的安定しており、持続的である。

Newcomb, Turner, & Convergence (1965), Sherif & Sherif (1969)

5. 態度は先天的なものというよりもむしろ学習されたものである。

Sherif & Sherif (1969), McGrath (1964)

6. 個々の対象に対する個別的態度は、お互いに関連をもち、構造され、態度群、態度布置を形成する。

Krech, Crutchfield, & Ballachey (1962)

以上が態度の特性であるが、これらは態度の定義に関してまとめられているものである。これら6つの観点から、態度という概念をほぼ理解することができる

と思われる

ら2つの研究の流れを何らかの関連で結びつけることが必要であると思われる。

II. 態度の構造的な研究

田中・松山(1965), 鮑戸(1965), 高木(1968a)らによると, 態度の構造についての研究には大別して2つの流れがあるとしている。それは, 態度内構造研究(態度成分論)と態度間構造研究(態度構造論)である。

態度内構造研究

(Intra-attitude organization research)

この立場に立つ研究は, 態度をそれを構成するいくつかの成分(構成要素)や側面に分け, これらの成分の特性を分析し, それらの相互の関連を解明しようとするものである。すなわち, ある対象に対する態度において, その態度を構成するいくつかの成分を設定し, これら成分間の対応関係や連関構造などを解明することが, 態度内構造研究の主な関心である。

Smith(1947), Campbell & Fisko(1959), Rosenberg(1956, 1960 a, b, c, 1965, 1968), Krech, Crutchfield, & Ballachey(1962), Carlson(1956), 高木(1968 b), Ostrom(1969), Kothandapani(1971), Kernan & Trebbi(1973), Norman(1975), 岩淵(1978) etc.

態度間構造研究

(Inter-attitude organization research)

この立場に立つ研究は, ある対象に対する態度が他の対象に対する態度とどのような関連性を持つかということを知りたいとするものである。すなわち, 種々の対象に対する諸態度間にどのような共変関係が存在するのか, また, これらの諸態度間相互にどのような関係があるのかを知りたいとするのが, 態度間構造研究の主な関心である。

Thurstone(1934), Carlson(1934), Ferguson(1940), Eysenk(1951), 田中(1954), 藤野・岡路・福島(1953), 河村・四方(1960) etc.

これら2つの態度構造の研究についての分類は, 今や古典的視点となっている観があるが, 個人のもっている態度を, ある特別な対象に対する態度と種々の対象に対する態度とに分けて, 態度の構造について研究することは有効なことであると思われる。しかし, 田中・松山・鮑戸・高木らが主張しているように, これ

II-1. 態度構造の規定

態度の構造については, 態度には認知(cognition)・感情(affect)・行動(behavior)という3つの構成要素があると主張する立場と, 態度は感情(評価)のみで構成されていると主張する立場とがある。

(A)多次元的概念としての態度

Rosenberg & Hovland(1960)は, 態度を, “特定の種類に対して一定の仕方で反応する先有傾向(predisposition)である”と定義し, 態度の構造については, 態度対象に対して個人が持つ感情からなる感情的成分(affective component), 態度対象について個人が持つ信念からなる認知的成分(cognitive component), さらに, 対象に対する行動傾向からなる行動的成分(behavioral component)の3つの成分から構成されているとした。また, Krech, Crutchfield, & Ballachey(1962)は, 態度を, “対象に対する positive あるいは negative な評価(認知的成分(cognitive component), 感情的成分(feeling component), 行動傾向的成分(action tendency component)からなる持続的体系である”と定義している。すなわち, 態度をある対象に対して一定の認知・感情・行動を示す傾向であると定義し, 態度の構成要素としてこれら3つの成分を認めているのである。

以下, これら3成分についてまとめてみたいと思う。

認知的成分

(cognitive component)

この成分は, 個人がある対象についても持っている情報・知識・意見・信念・考えなどによって構成されている。個人はある対象についての情報を直接あるいは間接的な接触から受け取り, その対象についての認知を形成する。この認知的成分の持つ特性については, 水原(1966, 1969)に詳しいが, 高木(1968a)は認知的成分の下位体系として, ①認知の豊富さ②認知の分化③認知の論理性④認知の統合性⑤認知の感情性, という5つの次元を設定している。

感情的成分

(affective component)

この成分は、ある対象についての感情 (feelings)・情動 (emotion) およびその評価 (evaluation) である。それは、“賛成—反対”、“好意—非好意”とかの評価および感情で示される。個人とある対象との関係において、個人の要求が満足され、快の感情を得たという経験を持っている対象に対しては“好き”とか“望ましい”といった態度が形成され、またその反対の場合には、“嫌い”とか“望ましくない”といった態度が形成される。

行動的成分

(behavioral component)

この成分は、ある対象についての、受容—拒否、接近—回避といった動機的な意図から構成されている。この行動的成分は、態度の動機側面、すなわち、行動に実現に作用する成分である。これに対して、認知のおよび感情的成分は行動の方向を決定する成分である。行動的成分は、ある対象との直接的あるいは間接的な接触から形成された対象への動機および行動の意図である。

以上のような3成分についての特性および各成分間

の関係について、Krech, Crutchfield & Ballachey (1962) は次のように述べている。

- (a)誘発性 (valence) : これは positive あるいは negative とかいった方向性であり、態度対象に対する好意あるいは非好意の程度を意味する。
- (b)多様性・多義性 (multiplexity): これは各成分を構成する要素の多義性およびその要素の数で表わされる。
- (c)一緻度 (consistency) : これは valence や multiplexity における各成分間の関連性を意味する。すなわち、態度体系が valence や multiplexity の程度においてどの程度一致しているかということである。
- (d)相互結合度 (interconnectedness) : これはある態度が他の態度とどのような性質の結合をどの程度しているか、すなわち、態度の全体的配置の中での interconnectedness ということである。
- (e)調和度 (consonance): これは態度群間の一致の程度ということである。

以上のような、多次元的概念としての態度の構造を Rosenberg & Hovland (1960) は図式化している (Fig. 1)。

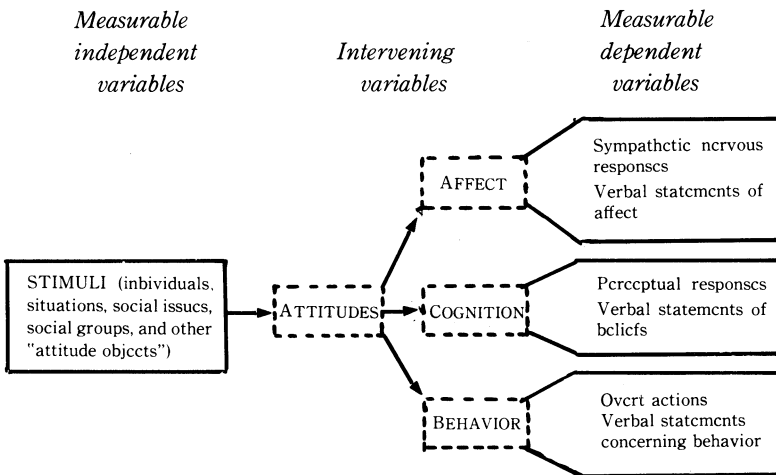


Fig. 1 Schematic Conception of Attitudes (from Rosenberg & Hovland, 1960)

これらの3成分が態度内成分として一般に認められている理想的成分であるが、これらがはたして、態度という概念の中において妥当なものであるかについては、Campbell, & Fiske (1959), Ostrom (1969), Kothandapani (1971) らが研究している。特に Kothandapani は、Campbell & Fiske の提唱した態

度内成分の収束妥当性 (convergent validity) と判別妥当性 (discriminant validity) を Ostrom の研究計画に沿って実証することを試み、態度内成分として、affective (feeling) component, cognitive (belief) component, behavioral (intention to act) component が存在することを見出している。

また、これらの3成分間にはそれぞれ高い相関があることが認められている。例えば、McGuire (1969) は、3成分はそれらの間の区別をつけることが必要でないほど非常に高い内的相関があることを示している。さらに、Krech, & Crutchfield, & Ballachey (1962) は3成分の間に“適度に高い”関係があることを示した(約+.5の相関係数があるとしている)。

さらに、態度内成分には一般に高くそして positive な内の一貫性を保とうとする傾向があることが広く認められている。(Rosenberg 1956 ; Fishbein, 1963. 1965 ; Ostrom 1969)

(B)一次元的概念としての態度

Fishbein & Ajzen (1975) は、態度の3成分について異なった見解をもっている。すなわち、態度は感情的成分・認知的成分・行動的成分を含むといった多次元的な概念規定はおこなわず、態度は評価あるいは感情であるという一次元的な概念規定をおこなったのである。

Fishbein & Ajzen は、態度を“与えられた対象のある側面について一貫した好意的あるいは非好意的な様式で反応する学習された先有傾向”であると定義する。そして態度の基本的形態として、①学習されたも

の (learned) ②行動を予測するもの (predisposition) ③そのような行為は対象に対して一貫した好意性あるいは非好意性をもっている (consistency favorable or unfavorable) ということを指摘している。さらに態度の構成成分については次のように考えている。態度とは、対象に対する評価的あるいは好意性を含んだ感情次元のみであるとする。そして認知的次元は、対象と属性とを結びつける主観的確率としての信念 (belief) であり、行動的次元は、態度と行動との間の媒介変数すなわち行動の決定因としての行動意図 (behavioral intention) であるとしている。

ここでは、多次元的概念としての態度では相互に関連があるとされている態度の3つの構成要素は、それぞれ別のものであるとして取り扱われる。そしてこれらの態度・信念・行動意図の関係はそれぞれ個々の間の関係ではなく、全体的な評価の総体 (set) の関係としてとらえられる。

このような態度・信念・行動意図との関係を、理論的・実証的に研究する際の概念的な枠組として、affect (feelings, evaluation), cognition (opinions, beliefs), conation (behavioral intention), behavior (observed overt acts) の4つのカテゴリーに分類し、図式化している (Fig. 2)。

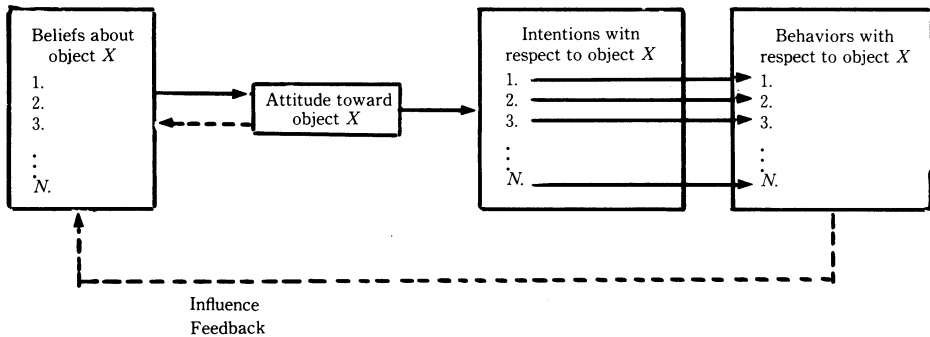


Fig. 2 Schematic presentation of conceptual framework relating beliefs, attitudes, intentions, and behaviors with respect to a given object. (from Fishbein & Ajzen, 1975)

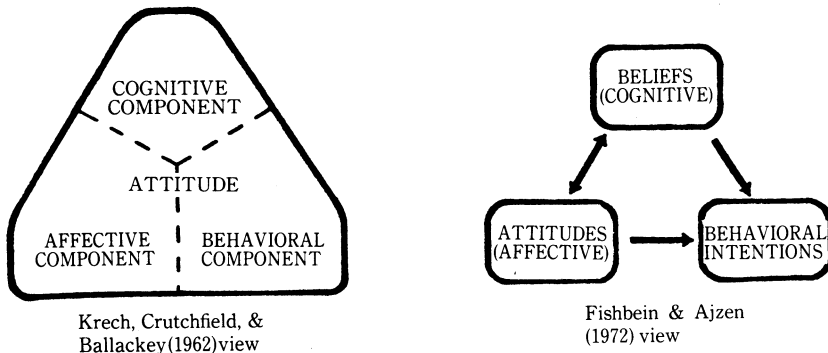


Fig. 3 Two viewpoints on components of attitudes (from OsKamp, 1977)

以上が、態度の構造を多次元的および一次元的にとらえる概念規定であるが、この2つの考え方の態度成分の規定の相違および各成分間の相関関係について Oskamp (1977) が図式化している (Fig. 3)。

II-2. 態度構造の研究

態度構造の規定のところ述べてのように、態度の構造には2つの相対する立場がある。したがって態度の構造の研究については、それぞれの立場から研究されている。すなわち、多次元的概念として態度の構造をとらえる場合には、3成分間の一貫性 (consistency) や階層的構造 (hierarchical structure) などに焦点を合わせて研究することが多い。これに対して、一次元的概念として態度の構造をとらえる場合には、信念や行動意図および行動と態度との関係に焦点を合わせて研究することが多い。

(A) 態度内成分の一貫性についての研究

Insko & Schopler (1967) は、態度内3成分の一貫性についての研究をまとめている。ここでは、各成分は positive (+)か negative (-)かという関係からその一致・不一致について考察されている。さらに Triandis (1971) も一貫性についてまとめているが、彼らの研究をふまえて、態度内成分の一貫性についてまとめてみたい。

(1) 認知的一貫性

(cognitive consistency)

これは、認知のレベルでの一致・不一致を取り扱う一貫性の研究である。飽戸 (1965) は、この認知的一貫性の研究を態度内構造研究における一貫性についての研究と別のものであると考えているが、本研究においては、態度の構成要素の1つである認知的成分の一致・不一致に焦点をあてているという点から、態度内成分の一貫性についての研究の中に含めて考えたい。また、Triandis (1971) はこのレベルでの一貫性の研究を態度内構造の一貫性の研究として扱っている。この認知的一貫性の研究については、Fishbein (1967)、田中 (1971) らがまとめている。そしてこれらの研究が一般には“一貫性理論 (均衡理論)”と呼ばれているものである。

この研究は Heider (1946) の研究に始まるものである。Heider (1946) の“バランス理論”、Newcomb (1953, 1961) の“A-B-Xモデル”、Osgood & Tannenbaum

(1955) の“適合性の理論”、Cartwright & Harary (1956) の“バランス構造”、Festinger (1957) の“認知的不協和理論”、Abelson & Rosenberg (1958) の“バランスマトリックス”、McGuire (1960 a, b, c) の“論理-感情の一貫性理論”、Rokeach & Rothman (1965) の“信念適合性の理論”など数多くの研究がある。これらの理論の流れを田中・藤原 (1970) は“態度理論の流れ”として図式化しているもので、その中で関係のあるところを一部抜粋する (Fig. 4)。

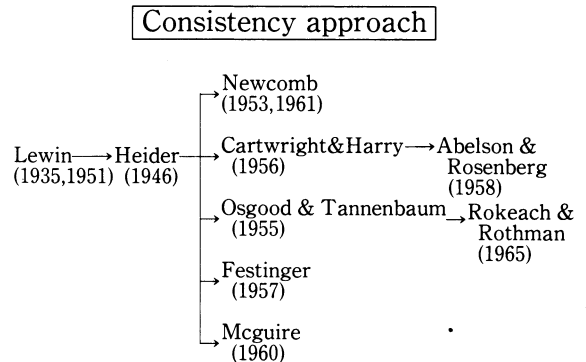


Fig. 4 cognitive consistency theory の流れ

(田中・藤原, 1970, p 287 “図3 態度理論の流れ”より抜粋)

この認知的一貫性の基本的な考え方を田中 (1971) は次のように要約している。「人間は、対人関係間、個々の認知的あるいは感情・信念・行動間において、内部的な非一貫性を最少にするような仕方で行動する。したがって不一致・非一貫性が生じた際には、それは一種の心理的な緊張状態である。そうした緊張は、人間にとって不安定な状態であるので、緊張緩和に向かって作用が起こる。その結果が認知的変化であり、別の言葉で述べるなら態度変容である。」

(2) 感情-認知的一貫性

(affective-cognitive consistency)

これは、認知と感情のレベルでの一致・不一致を取り扱う一貫性の研究である。このレベルにおいて注目すべきは、Rosenberg (1956, 1960 a, b, c, 1965, 1968), Rosenberg & Abelson (1960) らの一連の研究である。

Rosenberg は態度内の感情的成分の変化は認知的成分の変化をもたらす、またその逆も同様であるとしている。そして操作的には、催眠術を用いてまず感情的成分の変化を導くということを実証した。

ここで、Rosenberg は仮説を次のように定めた。すなわち、態度対象に対する感情の特性と強さは、その対象に結びついている認知と関係しているはずであ

る。また、対象に対する positive な感情は重要な価値の獲得を導くという信念と結びつき、これに対して、対象に対する negative な感情はその獲得のさまたげとなるとした。

次に、態度変容に関しては以下のような基本的命題を示した。すなわち、態度の感情的および認知的成分が相互に一致している場合にはその態度は安定した状態にある。しかし、感情的成分と認知的成分とがお互いに不一致であれば、そのような不一致に対する個人の耐性限界 (tolerance limit) を越えるまでその態度は不安定な状態にある。このような不安な状態の状態を克服するには次の3つの方法がある。④不一致を引き起こし態度を不安定なものとしたコミュニケーションの拒否、⑤不一致となった感情的成分と認知的成分とを分離することによって態度の分裂をはかる、⑥不一致を生じさせた変化に適合すること、すなわち態度変容をおこす。

以上のように Rosenberg は、感情的成分の変化が認知的成分の変化を引き起こし態度は安定した状態になるという感情的成分→認知的成分の一貫性を実証している。これに対して、Carlson (1956) は認知的成分→感情的成分という一貫性について実証した。さらに、Rorier & Lott (1967) は GSR (Galvanic Skin Response) 反応を感情的反応とし、認知的反応には態度尺度 (self-report attitude scale) を用いて一貫性について研究し、認知的成分⇄感情的成分という一貫性を実証している。

以上のような感情—認知的一貫性は、認知的一貫性と同様なホメオスタティック (homeostatic) な仮定にもとづいて研究されている。また、最近では、Milne & Meier (1976) が Rosenberg (1956, 1968) と Rosenberg & Abelson (1960) の感情—認知の一貫性理論について、グラフィックな立場から研究している。

(3)感情—認知—行動の一貫性

(affective-cognitive-behavioral consistency)

これは、態度内成分の認知・感情・行動の3つの構成要素間の一致・不一致を扱う一貫性の研究である。態度の3成分には、それぞれ高い相関と一貫性を保とうとする傾向があるということは前述したように広く認められているのだが、このことを実証しようとした研究は一致した結果を示していない。すなわち、実際の行動との関係において、これらの成分間の一貫性を認める研究例と認めない研究例とに分けられる。

Insko & Schopler (1967) は、この3成分間の一貫性についての研究を、行動変化の結果としての感情

—認知的変化 (affective-cognitive change as a consequence of behavior change) と認知—感情的変化の結果としての行動変化 (behavior change as a consequence of cognitive-affective change) とに分けている。そして行動変化にもとづく感情—認知的変化の方が3成分間より高い一貫性を示すと述べている。Insko & Schopler の研究を簡単にまとめると以下のようなになる。

①行動変化にもとづく感情—認知的変化

これは操作的には個人にその個人のもっている態度と反対の態度 (counterattitude) を強制的にとらせ、それにもとづく各成分間の変化を解明しようとするものである。すなわち個人は自分のとった反対の行動に適合するように自分の認知や感情を変化させるという仮定にもとづいている。このように行動の変化が感情・認知の変化を引き起こすということを実証したものには、Bostrom, Valandis, & Rosenbaum (1961), Culbertson (1957), Harvey & Bevely (1961), Janis & King (1954), King & Janis (1956), Stanley & Klausmeier (1957), Zimbardo (1965) などの研究例がある。

②認知—感情的変化にもとづく行動変化

これは操作的には個人に説得的なコミュニケーションを与え、それにもとづく変化を解明しようとするものである。すなわち、個人に認知—感情的な変化がおこればそれにもなって行動の変化がおこるであろうという仮定にもとづいている。このことを実証したものには、Greenwald (1965), Duncker (1938), Lewin (1958), Coch, & French (1958) などがある。しかし、この変化にもとづく一貫性はその程度が低いあるいは一貫性はないという結果 (Fleishman, Harris, & Burt 1955; Festinger 1964, etc) を示している。

Insko & Schopler は、態度内3成分の一貫性についての研究をまとめていてだけ実証していないのであるが、Norman (1975) はこれら3成分の一貫性について実証している。Norman は Rosenberg (1960 a, 1968) の研究をもとにし、感情—認知の一貫性が高い程、実際の行動の予測には有効であるという結果を示している。

(B)態度内成分の構造についての研究

以上のような態度内成分の一貫性に注目して、態度内成分の階層的構造 (hierarchical structure) を提唱したのが Kernan & Trebbi (1973) である。

Kernan & Trebbi は態度内構造として、認知→感情

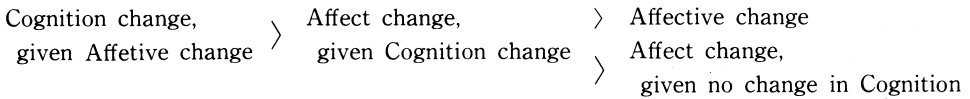
→行動という階層的構造を示した。すなわち、Kernan & Trebbi は Rosenberg (1956, 1965) による一貫性の理論に注目し、一貫性を保とうとするホメオスタティックな仮説から階層構造について実証している。

すなわち、“説得的コミュニケーションはまず態度の認知的成分に作用する。したがって認知的成分には変化を含んだ不一致が生ずる。そしてもし十分な認知変化あるいは認知の再組織がコミュニケーション（受けとられた認知）によって生ずるならば、不一致に対する感情耐性が越えられることになり、態度の感情的成分は変化することになる。”つまり、認知的成分における変化を含んだ不一致を解消し、態度内構造の一貫性を保つために感情的成分を変化させるのである。また同様に、感情的成分の変化を含んだ不一致に対する行動（意図）成分の耐性が越えられた時、行動（意図）成分は変化することになる。

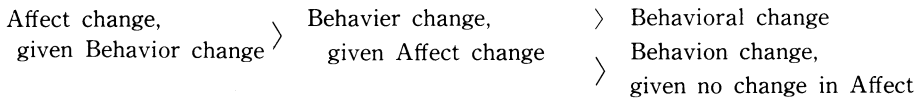
そして、この階層的仮説を認知変化→感情変化と感

情変化→行動変化という2つの対の関係に注目して、検証している。すなわち、感情変化がある時はそれに先行する認知変化が必ずあり、行動変化がおこる場合にはそれに先行する感情変化が必ずあるとしている。ここで、認知変化→感情変化という関係にのみ限って者えれば、もし、感情変化がたえず認知変化に関係していて、認知変化がたえず感情変化に関係しているとはかぎらなければ、認知変化は感情変化の必要条件であり感情変化は認知変化の必要十分条件である。このことが実証されれば、認知→感情という階層的構造が示されることになる。同様のことだが、感情と行動においても実証されれば、感情→行動という階層的構造が示されることになる。したがって、以上2つの条件が満足されれば、認知→感情→行動という階層的構造が実証されることになる。これらの条件は操作的には次の図のようになる (Fig. 5)。

[Cognition→Affect]



[Affect → Behavior]



[Cognition→Affect→Behavior]

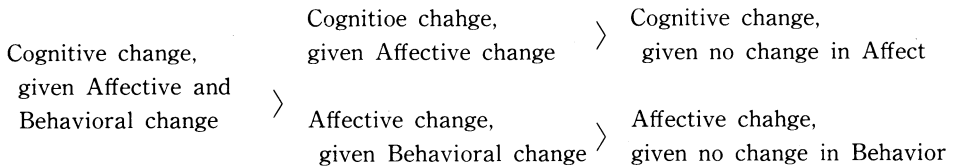


Fig. 5 Condition for Cognitive→Affective→Behavioral Hierarchical Structure

このKernan & Trebbi の階層的構造を岩淵 (1978) は検証したが、3成分間の階層的構造の仮説は支持される傾向がみられないこともないという程の結果しか得ることができなかった。

しかし、このような視点から態度の構造を研究することは注目に値すると思われる。つまり、ある人の態度構造がコミュニケーションへの反応を媒介としているのであれば、またコミュニケーションの受け手の行動がそのコミュニケーションの内容に対する受け手の態度によって影響されるのであれば、このような研究の視点は態度の形成や態度の変容などの分野に有効な

解釈を与えることができると思われる。

(C)信念・態度・行動の関係についての研究

以上のような態度内成分間における研究と異なつて、Fishbein & Ajzen (1975) は、信念と態度、および態度と行動のそれぞれの関係について興味深い見解を示している。

すなわち、Fishbein は前述したように、態度を感情あるいは評価としてとらえており、態度内成分である認知的成分や行動的成分は、それぞれ信念および行動意図と対応するものであり、態度とは別の概念である

と規定する。また、信念や態度および態度や行動意図の一貫性はそれぞれの関係における一致・不一致ではなく、評価の全体的な総体の関係としてとらえられる。したがって、Fishbein の理論は、前述した一貫性理論 (consistency theory) に対して総和理論 (summation theory) と呼ばれている。

そして、総和理論において Fishbein (1967 a, b) は信念と態度との間の関係について次のような関数式を提唱する。

$$A_o = \sum_{i=1}^N B_i a_i$$

- A_o = the attitude toward some object "o"
- B_i = belief *i* about *o*, that is the probability that *o* is related to some other object *x_i*
- a_i = the evaluative aspect of B_i, that is, the responder's attitude toward *x_i*
- N = the number of beliefs

この式は、ある対象に対する態度はその対象に関するその人の信念とそれらの信念の評価的側面との関数であることを示している。ここで、信念と態度との関係については、一貫性があるかないかということより、信念を対象と属性とを結びつける主観的確率として定義し、属性が評価を伴うとき態度が形成されるとしている。

このような理論から、Fishbein (1963, 1965, 1967 a, b), Fishbein & Fishbein (1965), 松山 (1970), Kilty (1971), Smith & Clark (1973) らが態度と信念との関係について研究している。

ここで、Fishbein (1967 a) は、態度構造を価値評価と道具的な (instrumental) な評価との積の総和としてとらえる Rosenberg (1956) の仮説に似ているとしていることは興味深い。そして Fishbein は代数的に Rosenberg の仮説を次のように示している。

$$A_o = \sum_{i=1}^N I_i V_i$$

- A_o = the attitude toward the object
- I_i = the belief or probability that the object will lead to or block the attainment of a given valued state "i"
- V_i = the "value importance" or the amount of affect expected from valued state "i"
- N = the number of beliefs

次に、態度と行動についてはそこに行動意図を含めて考えている。すなわち、行動意図が態度と行動との媒介変数つまり行動の決定因として定義される。そし

て、この態度と行動との関係は次のような関数式で示される (Fishbein 1967 b)。

$$B \approx BI = [A_{act}]_{w_o} + \left[\sum_{i=1}^N NB_i MC_i \right]_{w_i}$$

- B = behavior
- BI = behavioral intention
- A_{act} = attitude toward performing a given behavior in a given situation (attitude toward act)
- NB = normative beliefs
- MC = motivation to comply with the norm
- w_o, w_i = empirically determined weights
- N = the number

この式は、行動 (行動意図) が行動に対する態度と信念としての規範さらにそれらの規範に従う動機づけの関数であることを示している。ここで、態度と行動との関係は、その行動がとらえられる状況とのかかわりあいにおいて考えられる。そしてこの式によって個人の態度から行動が予測できるとしている。

このような態度と行動との関係については、最近の態度研究の中心的課題であり、多くの研究者がこの関係について実証している。たとえば、Fishbein (1966, 1967 b), Ajzen & Fishbein (1969, 1970, 1972, 1973, 1974, 1977), Fishbein & Ajzen (1972, 1974, 1975), 井上・田中 (1973) などの研究がある。

これまで、態度の構造的な研究として、態度内成分についての一貫性および構造的な研究、さらに、態度と他の概念 (信念・行動意図) との関係についての研究を概観してきたが、この2つの理論的対立を Brouvold (1972 a, b, 1973) は要約し、それを実証している。

Brouvold (1972 a) によれば、「3つの成分を取り扱った2つの理論的対立がある。それは、一貫性の研究 (consistency approach) と行動的な研究 (behavioral approach) である。一貫性の研究は、歴史的にはゲシュタルト学派にその端を発するものであり、個人の感情的・認知的・行動的側面の一致やバランスを強調するものである。この3成分間の一貫性理論 (consistency theory) は Insko & Schopler (1967) にまとめられている。他方、行動的研究は、歴史的には、行動主義にその端を発するものであり、顕在的な反応を示す刺激変数・強制的経験・内的状態などを強調するものである。信念・態度・行動の間関係を取り扱った行動理論 (behavioral theory) は Fishbein (1967) にまとめられている」としている。

以上、態度の構造についての研究を概観してきたが、今後さらに詳しい態度の構造的な研究、すなわち、態度内成分相互の対応関係や連関構造についての研究や総和理論の応用による態度内構造の研究さらにある対象に対する態度の内部構造だけではなく諸対象に対する個人の態度内構造についての研究などが必要であると思われる。

参考文献

- Abelson, R. P. & Rosenberg, M. J., Symbolic psychological : A model of attitudinal cognition, *Behavioral Science*, 1958, **3**, 1-13.
- Ajzen, I., & Fishbein, M., The prediction of behavioral intentions in a choice situation, *Journal of Experimental Social Psychology*, 1969, **5**, 400-416.
- Azen, I., & Fishbein, M., The prediction of behavior from attitudinal and normative variables, *Journal of Experimental Social Psychology*, 1970, **6**, 466-487.
- Ajzen, I., & Fishbein, M., Attitudes and normative beliefs as factors influencing behavioral intentions, *Journal of Personality and Social Psychology*, 1972, **21**, 1-9.
- Ajzen, I., & Fishbein, M., Attitudinal and normative variables as predictors of specific behaviors, *Journal of Personality and Social Psychology*, 1973, **27**, 41-57.
- Ajzen, I., & Fishbein, M., Factors influencing intentions and the intention-behavior relation, *Human Relations*, 1974, **27**, 1-15.
- Ajzen, I., & Fishbein, M., Attitude-behavior relations : A theoretical analysis and review of empirical research, *Psychological Bulletin*, 1977, **84**, 888-918.
- Allport, G. W., Attitudes, In C. Murchion, (Ed.), *Handbook of Social Psychology*, Worcester Clark University Press, 1935, 798-844.
- 鮑戸弘, 態度構造研究の方法論に関する諸問題—要因分析との関連を中心に—, *心理学評論*, 1965, **9**, 267-288.
- Anderson, R. L., & Fishbein, M., Prediction of attitude from the number, strength and evaluative aspect of beliefs about the attitude object, *Journal of Personality and Social Psychology*, 1965, **2**, 437-443.
- Bostrom, R., Vlandis, J., & Rosenbaum, M., Grades as reinforcing contingencies and attitude change, *Journal of Educational Psychology*, 1961, **52**, 112-115.
- Brurold, W. H., Consistency among attitudes, beliefs, and behavior, *Journal of Social Psychology*, 1972a, **86**, 127-134.
- Brouvold, W. H., Attitude-belief and attitude-behavior consistency, *Journal of Social Psychology*, 1972b, **88**, 241-246.
- Brouvold, W. H., Belief and behavior as determinants of attitude, *Journal of Social Psychology*, 1973, **90**, 285-289.
- Campbell, D. T., & Fiske, D. W., Convergent and discriminant validation by multitrait-multimethod matrix, *Psychological Bulletin*, 1959, **56**, 81-105.
- Carlson, H. B., Attitudes of undergraduates students, *Journal of Social Psychology*, 1934, **5**, 202-212.
- Carlson, E. R., Attitude change and attitude structure, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1956, **52**, 256-261.
- Cartwright, D. & Harary, F., Structural balance : A generalization of Heider's theory, *Psychological Review*, 1956, **63**, 277-293.
- Coch, L., & French, J. R. P., Overcoming resistance to change, In E. E. Maccoby, T. M. Newcomb, & E. L. Hartley (Eds.), *Readings in Social Psychology* (3rd ed.) New York : Holt, Rinehart and Winson, 1958, 233-250.
- Culbertson, F. M., Modification at an emotionally held attitude through vole-playing, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1957, **54**, 230-233.
- Doob, L. W., The behavior of attitudes, *Psychological Review*, 1947, **54**, 135-156.
- Duncker, K., Experimental modification of children's food preference through social suggestion, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1938, **33**, 489-507.
- Eysenck, H. J., Primary social attitudes as related to social class and political part, *British Journal of Sociology*, 1951, **2**, 198-209.
- Fergusson, L. W., The measurement of primary social attitudes, *Journal of Psychology*, 1940, **10**, 119-203.
- Festinger, L., *A theory of cognitive dissonance*, Row Peterson, 1957. (相良守次訳, 認知的不協和の理論, 誠信書房, 1965)
- Festinger, L., Behavioral support for opinion change, *Public Opinion Quarterly*, 1964, **28**, 404-417.
- Fishbein, M., An investigation of relationship between beliefs about an object and the attitude toward that object, *Human Relations*, 1963, **16**, 233-239.
- Fishbein, M., A consideration of beliefs, attitudes, and their relationships, In I. D. Steiner, & M. Fishbein, (Eds.), *Current studies in Social Psychology*, Holt, Rinehart & Winston, 1965, 107-120. (末永俊郎訳, 信念, 態度および両者の関係についての考察, 田中靖政編訳, 現代アメリカ社会接理学, 日本評論社, 1970, 250-272.)
- Fishbein, M., The relationship between beliefs, attitudes, and behavior, In S. Feldman (Ed.), *Cognitive Consistency*, New York, Academic Press, 1966, 199-223.
- Fishbein, M., (Ed.), *Readings in Attitude Theory and Measurement*, New York : Wiley, 1967.
- Fishbein, M., A behavior theory approach to the relations between beliefs about an object and the attitude toward the object, In M. Fishbein (Ed.), *Readings in Attitude Theory and Measurement*, New York : Wiley, 1967a, 389-400.
- Fishbein, M., Attitude and the prediction of behavior, In M. Fishbein (Ed.), *Readings in Attitude Theory and Measurement*, New York : Wiley, 1967b, 477-492.
- Fishbein, M., & Ajzen, I., Attitudes and opinions, *Annual Review of Psychology*, 1972, **23**, 487-544.
- Fishbein, M., & Ajzen, I., Attitudes toward objects as predictors of single and multiple behavioral criteria, *Psychological Review*, 1974, **81**, 59-74.

- Fishbein, M., & Ajzen, I., *Belief, attitude, Intention, and Behavior : An Introduction to Theory and Research*, Addison-Wesley, 1975.
- Fishbein, M., & Hunter, R., Summation versus balance in attitude organization and change, *Journal of Abnormal Social Psychology*, 1964, **69**, 505-510.
- Fleishman, E., Harris, E., & Burt, H., *Leadership and supervision in industry : An evaluation of a supervisory training program*, Columbus : Ohio state University, Bureau of Educational Research, 1955.
- 藤野武：岡路市郎：福島正治，社会的態度の因子分析的研究，北海道学芸大学紀要，1953，4，1-30。
- 藤原武弘，態度，田中国夫編著，新版現代社会心理学，誠信書房，1977，149-159。
- Green, B. F., Attitude measurement, In G. Lindzey (Ed.), *Handbook of Social Psychology*, Addison-Wesley, 1954, **1**, 335-369. (城戸・富永訳，態度測定，社会心理学講座，第3巻，1，みすず書房，1957)
- Greenwald, A. G., Behavior change following a persuasive communication, *Journal of Personality*, 1965, **33**, 370-391.
- Harvey, O. J., & Beverly, G., Some personality correlates of concept change through role playing, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1961, **63**, 125-130.
- Heider, F., Attitude and cognitive organization, *Journal of Psychology*, 1946, **21**, 107-112.
- 井上和子・田中国夫，行動の予測因としての態度およびその他の変数に関する研究(I)，心理学研究，1973，**44**，195-205。
- Insko, C. A., & Schopler, J., Triadic consistency : A statement of affective-cognitive-conative consistency, *Psychological Review*, 1967, **74**, 361-376.
- 岩淵干明，態度内連関構造に関する一考察，関西学院大学社会学部士論文，1978 (未公開)
- Janis, I. L., & King, B. T., The influence of role-playing on opinion change, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1954, **49**, 211-218.
- 河村豊次・四方燿子，社会的態度の発達，1960，**4**，146-165。
- Kernan, J. B., & Trebbi Jr. G. G. Attitude dynamics as a hierarchical structure, *Journal of Social Psychology*, 1973, **89**, 193-202.
- Kilty, K. M., Some determinants of the strength of relationship between attitudinal affect and cognition, *Journal of Social Psychology*, 1971, **83**, 275-287.
- King, B. F., & Janis, I. L., Comparison of the effectiveness of improvised versus nonimprovised role-playing in producing opinion change, *Human Relations*, 1956, **9**, 177-186.
- Kothandapani, V., Validation of feeling, belief, and intention to act as three components of attitude and their contribution to prediction of contraceptive behavior, *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, **32**, 321-333.
- Krech, D., Crutchfield, R. S., & Ballachey, E. L., *Individual in Society*, New York : McGraw-Hill, 1962.
- Lewin, K., *Dynamics Theory of Personality*, New York : McGraw-Hill, 1935. (相良・小川訳，パーソナリティの力学説，岩波書店，Fergsou, L. W., The measurement of primary social attitudes, *Journal of Psychology*, 1940, **10**, 119-203.
- Lewin, K., *Field Theory in the Social Sciences*, New York : Harper, 1951. (猪股訳，社会科学における場の理論，誠信書房，1956)
- *Lewin, K., Group decision and social change, In E. E. Maccoby, T. M. Newcomb, & E. L. Hartley (Eds.), *Readings in Social Psychology (3rd ed.)*, New York : Holt, Rinehart and Winston, 1958, 197-211.
- 松山安雄，態度内構造と態度測定に関する研究，年報社会心理学，勁草書房，1970，183-198。
- McGrath, J. E., *Social Psychology : A belief introduction*, New York : Holt, 1964.
- McGuire, W. J., Cognitive consistency and attitude change, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1960a, **60**, 345-353.
- McGuire, W. J., Direct and indirect persuasive effects of dissonance-producing messages, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1960b, **60**, 354-358.
- McGuire, W. J., A syllogistic analysis of cognitive relationships, In M. J. Rosenberg, & C. H. Hovland (Eds.), *Attitude Organization and change*, New Haven : Yale University Press, 1960c, 65-111.
- McGuire, W. J., The nature of attitudes and attitude change, In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.) *The Handbook of Social Psychology (2nd ed.)*, Addison-Wesley, 1969, 136-314.
- Milne, R. A., & Meier, K. J., A graphic approach to Rosenbergs affective-cognitive consistency theory, *Human Relations*, 1976, **29**, 273-285.
- 水原泰介，態度の形成・変化と認知構造，東京大学教養部人文科学紀要，1966，**40**，1-82。
- 水原泰介，態度の形成と認知構造，東京大学養部人文科学紀要，1969，**49**，25-110。
- Newcomb, T. M., An approach to the study of communicative acts, *Psychological Review*, 1953, **60**, 393-404.
- Newcomb, T. M., Varieties of interpersonal attraction, In D. Cartwright, & A. Zander, (Eds.), *Group Dynamics (2nd ed.)*, Row Peterson, 1960, 104-119.
- Newcomb, T. M., *The acquaintance process*, New York : Holt, 1961.
- Newcomb, T. M., Turner, R. H., & Converse, P. H., *Social Psychology : The Study of Human Interaction*, New York : Holt, Rinehart & Winston, 1965. (古畑和考訳，社会心理学—人間の相互作用の研究—，岩波書店，1973)
- Norman, R., Affective-cognitive consistency, attitude, conformity, and behavior, *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, **32**, 83-91.
- Osgood, C. E., & Tannenbaum, P. H., The principle of congruity in the prediction of attitude change, *Psychological Review*, 1955, **62**, 42-55.
- Osgood, C. E., Suci, G., & Tannenbaum, P. H., *The Measurement of Meaning*, Urbana : University of Illinois Press, 1957.
- Oskamp, S., *Attitudes and Opinions*, Prentice-Hall, 1977.
- Ostrom, T. M., The relationship between the affective,

- behavioral, and cognitive components of attitude, *Journal of Experimental Social Psychology*, 1969, 5, 12—30.
- Porier, G. W. & Lott, A. J., Galvanic skin responses and prejudice, *Journal of Personality and Social Psychology*, 1967, 5, 253—259.
- Rokeach, M., & Rothman, G., The principle of belief congruence and the congruity principle as model of cognitive interaction, *PsJournal of Psychology*, 1946, 21, 107—112.
- Rokeach, M., & Rothman, G., The principle of belief congruence and the congruity principle as model of cognitive interaction, *Psychological Review*, 1965, 72, 128—172.
- Rosenberg, M. J., Cognitive structure and attitudinal affect, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1956, 53, 567—372.
- Rosenberg, M. J., A structure theory of attitude dynamics, *Public Opinion Quarterly*, 1960a, 24, 319—340.
- Rosenberg, M. J., Cognitive reorganization in response to the hypontic reversal of attitudinal affect, *Journal of Personality*, 1960b, 28, 39—63.
- Rosenberg, M. J., An analysis of affective-cognitive consistency, In M. J. Rosenberg, & C. H. Hovland, (Eds.), *Attitude Organization and change*, New Haven : Yale University Press, 1960c, 15—64.
- Rosenberg, M. J., Inconsistency arousal and reduction in attitude change, In I. D. Steiner, & M. Fishbein, (Eds.), *Current King, B. F., & Janis, I. L., Comparison of the effectiveness of improvised versus nonimprovised role-playing in producing opinion change, Human Relations*, 1956, 9, 177—186.
- Rosenberg, M. J., Inconsistency arousal and reduction in attitude change, In I. D. Steiner, & M. Fishbein, (Eds.), *Current Studies in Social Psychology*, New York : Holt, Rinehart & Winston, 1965, 121—134.
- Rosenberg, M. J., Hedonism, inauthenticity, and other goads toward expansion of a consistency theory, In R. P. Abelson, E. Aronson, W. J. McGuire, T. M. Newcomb, M. J. Rosenberg, & P. H. Tannenbaum, (Eds.), *Theories of Cognitive Consistency : A Source Book*, Rand McNally, 1968, 73—111.
- Rosenberg, M. J., & Abelson, R. P., An analysis of cognitive balancing, In M. J. Rosenberg, & C. I. Hovland, (Eds.), *Attitude Organization and change*, New Haven : Yale University Press, 1960, 112—163.
- Rosenberg, M. J., & Hovland, C. I., Cognitive, affective, and behavioral components of attitude, In M. J. Rosenberg, & C. I. Hovland, (Eds.), *Attitude Organization and change*, New Haven : Yale University Press, 1960, 1—14.
- Shaw, M. E. & Wright, J. M., *Scales for the Measurement of Attitudes*, McGraw-Hill, 1967.
- Sherif, M., & Sherif, C. W., *Social Psychology*, Harper, 1969.
- Smith, M. B., The personal setting of public opinion : A study of attitudes toward Russia, *Public Opinion Quarterly*, 1947, 11, 507—523.
- Smith, A. J., & Clark, III, R. D., The relationship between attitude and beliefs, *Journal of Personality and Social Psychology*, 1973, 26, 321—326.
- Stanley, J. C., & Klausmeier, H. J., Opinion constancy after formal role playing, *Journal of Social Psychology*, 1957, 46, 11—18.
- 高木修, 社会的態度の研究(2)—態度構造研究概観—, 関西大学社会学論集, 1968a, 2, 38—60.
- 高木修, 社会的態度の研究(3)—態度内構造, 態度間構造の因子分析的研究—, 関西大学社会学論集, 1968b, 2, 59—92.
- 田中国夫, 社会的態度の測定論的研究(2), 心理学研究, 1954, 24, 17—24.
- 田中国夫, 態度構造と変容(I)・(II)—貫性理論と総和理論に関する概観—, 関西学院大学社会学部紀要, 1971, 22, 279—292, 23, 27—42.
- 田中国夫・藤原武弘, 態度の形成・変容理論に関する概観—実験社会心理学的アプローチを中心にして—, 心理学評論, 1970, 13, 279—304.
- 田中国夫・松山安雄, 態度構造と態度測定の問題, 心理学評論, 1965, 9, 251—266.
- Thurstone, L. L., Vector of mind, *Psychological Review*, 1934, 41, 1—32.
- Triandis, H. C., *Attitude and Attitude change*, John Wiley & Sons, 1971.
- Zimbardo, P. G., The effect of effort and improvisation on self-persuasion produced by role-playing, *Journal of Experimental Social Psychology*, 1965, 1, 103—120.